

〔第30回学術集会 シンポジウムⅡ〕

もうひとつのいえづくりから見えてくる家族看護のいま

香川大学

(座長) 松本 啓子

高知県立大学

(座長) 長戸 和子

今回のシンポジウムでは中山祐一先生（大阪公立大学）、林信平先生（香川大学）、江口八千代先生（認定特定非営利活動法人ファミリーハウス）からの活動をご報告いただき、新たないえづくりに向けて、異なった視点からの捉えをご提案いただくことで新しい家族看護のあり方や可能性について議論を深めることができた。

中山祐一先生のご講演「重症心身障害のある成人の一人暮らしに向けた家族のもうひとつのいえづくり—新しい家族看護のあり方を探る—」では、家族にとって大きな挑戦である重症心身障害を有しながらの一人暮らしを実現した取り組みについてご紹介いただいた。高齢になった親が、自ら支援者の輪を拡げ創り画策し連携を継続し、その中で親も気付かなかった子どもの新たな表情を見つけ、次への一歩を踏み出していった過程と、支援者としての関わりを通して、新しい家族のカタチの可能性を感じたご経験をお話しいただいた。

林信平先生のご講演「大学組織内で働く期間に第三の家の構築に取り組む活動の紹介」では、大学教員の立場から、地域の様々な職種の方々と連携し地域での看護の底上げのために何ができるか考える、一般社団法人を立ち上げた理想と意思についてお話しいただいた。同じ志を持つ仲間とともに地域を考えることは、家族を考えることでもある。地域での教育フィールドが研究フィールドになり、地域活動フィールドでもある。人間関係を創り地元企業も巻

き込み繋がりを創る。活動そのものが、地域に住む皆にとってのもうひとつのいえという感覚になれるよう大きく包み込む活動に育てたいとする思いを伝えていただいた。

江口八千代先生のご講演「病気の子どもと家族の「日常生活」を支援する—ファミリーハウス30年の活動—」では、長期入院治療をしている子どもの母親たちの切実な声を受けて発足した団体の30年余となる活動をご紹介いただいた。設立当初とは医療も社会状況も変化し、「病院近くの理想の家」としての新たな役割が求められている。医療者だけでなく、多様なボランティアの方々と協働し、重篤な病や長期に渡る治療といった非日常を経験している家族にとっての「日常生活」を護る取り組みを教えていただいた。

世界的な規模で感染症が猛威を振るい、我々の生活は変容を余儀なくされている。様々な面で多様性が重要視される中、家族のありようも、またそこへの介入のしかたにも柔軟さが求められている。今回のシンポジウムを通して、変わりゆく社会の中で私たち看護専門職者も、固定化した家族観にとらわれることなく、多様な視点を持ち多様な立場から家族の伴奏者としてかかわることの重要性を再認識することができた。

それぞれの貴重な実践を共有してくださったシンポジストの皆様、ご参加いただいた皆様に改めて感謝申し上げます。